（寄稿）

国立特別支援教育総合研究所研究紀要に今後期待すること

小　林　倫　代

（国立特別支援教育総合研究所　名誉所員）

研究所の研究紀要 50 巻の刊行、おめでとうございます。

昨年、研究所の創立 50 周年行事が行われたことを考えますと、研究所の研究紀要は、創立された翌年から刊行されていたことになります。

１．研究紀要への投稿を振り返って

私事で恐縮ですが、私が研究所に勤務したのは、1976 年度から 1986 年度までと 1996 年度から 2016 年度までになります。初めて研究所の研究紀要に投稿していたのはいつのことだったのかを思い出してみました。現在の研究所の組織とは異なり、障害種別の研究部があったころに私は研究補助員として勤務していました。そして、研究補助員でありながらも周囲の先生方のご指導をいただき、研究紀要第 6 巻（1979 年）に筆頭執筆者として論文を投稿しました。これが研究紀要への初めての投稿でした。

また、国立久里浜養護学校（現筑波大学附属久里浜特別支援学校）の教員として勤務していた際、口唇口蓋裂のある子供を担任し、その子供の食事指導をどのようにしたらよいのか分からずに、研究所の研究員に相談したことがきっかけで、研究紀要に投稿することを勧められ、投稿しました（17 巻）。この時には、研究所の研究員に足しげく学校に来ていただき食事場面を何度も見ていただき、食事指導に関して助言していただいたことや執筆にあたって多くのご指導とご助言をいただいたことを思い出しました。

その後、再び研究所に勤務して、学校に勤めていた時に難しいと思っていた保護者とのかかわりについての研究やことばの教室のあり方に関する研究等を行い、共同研究者と共に論文を投稿しました（26 巻、27 巻、28 巻、31 巻）。その中には、科学研究費補助金研究の成果の一部も含まれています。研究所の研究は、個人で行うものではなく、チームで行うので、研究の進め方や論文の作成に関しチーム内で検討することも大いに勉強になりました。

芸人が自分の芸を磨いて観客の前で披露したり、芸術家が自分の作品を展覧会等に出品したりしてその評価を得るように、研究者は自分の行った研究を論文として表し、関係する人たちから意見等を受けることが大事なのではないかと考えています。もちろん論文を書き上げるまでには、それなりのエネルギーと時間が必要です。例えば、自分の研究に関連する論文を読み込むことが必要です。関連する論文をたくさん読むことで、最近の研究動向を把握することができます。そして、その研究分野における自分の研究の位置づけを示したり、独自性をアピールしたりすることもできるようになります。論文を書き上げるには、生みの苦しみがありますが、研究テーマをさらに深く掘り下げ、新たな課題を見出す機会ととらえ、特に若い研究者は、研究所の研究紀要への投稿を積極的に行い、自分の資質を高めていってほしいと思います。

２．研究紀要の査読を振り返って

私が在職していた当時は、研究所の研究紀要の査読は、上席総括研究員のみで行っていました。投稿論文が多いときには、一人で 4～5 本の論文を読み、2～3 本の論文の主査になりました。

査読をしていて、困ったことは、何を言いたいのか、何を明らかにするために書いた論文なのかが分からな

いときです。研究所の研究員が投稿した論文ですので、投稿された論文は、できる限り研究紀要に掲載できるようコメントして修正を促します。しかし、その研究領域の中での研究の位置づけや研究の背景が不明確であったり、何を明らかにしようとしているのか（研究の目的）が分かりにくかったり、結果から導き出された考察の展開が論理的でなかったりする場合には、コメントをするのも難しくなります。

論文は、研究の背景（問題）を踏まえて、研究の目的を明確に示し、その目的を明らかにするために適切な方法を用いて実施した結果を示し、その結果を先行研究等との比較検討などを行って考察する、という一連の流れがあります。論文を発表することは、研究で見出された知見を周囲と幅広く共有するためでもあります。したがって、何に基づいて述べているのか、その内容は分かりやすく述べられているか、そしてその研究成果を活用しようと思ったときに再現できるように示されているかなどが重要になります。

論文で重要になるのは、得られた結果を踏まえて、何をどのように述べるのか、という考察の部分だと考えます。自分が予想していた通りの結果が出ればよいのですが、そうでないときもあります。そのような時、どうしてその結果になったのかを考えて述べることが重要です。論の展開の方法として、帰納法や演繹法があります。帰納法は、複数の事実や事例を並べ、これらの事象に共通する情報・ルールを抽出し、共通項を統合して結論を得るという考え方です。この進め方は、研究所の研究でも多く行われていると思います。多くの事例があるとその結果に説得力が増すと考えられます。ただし、論理に矛盾や飛躍があると説得力を失ってしまいます。一方の演繹法は、「A ならば B」という事実と「B ならば C」という事実から「A ならば C」というように複数の事実を足し合わせて結論を導き出す考え方です。帰納法も演繹法も複数の事例や事実を組み合わせて、論理的推論によって結論を導きます。従って、示している事例や事実に信憑性があること、それを踏まえて展開する論理に飛躍がないこと、意図的かつ強引に関連付けたりしないようにすることなどが大切です。推論するには、独りよがりではなく、先行研究の結果などを踏まえた、誰が読んでも納得できる内容にまとめることが重要で、研究チームの知恵を結集することになります。

研究紀要に論文を投稿するという機会を持つことで、情報を整理し、自分の考えを整理し、新たな課題を見出していけると考えます。学会誌等に投稿するのと変わりがないと考えられるかもしれませんが、研究所の紀要は、査読にかかる期間が短く、論文の作成や修正にあたっては周囲に相談できるというメリットがあります。

３．今後の研究紀要に向けて

時が流れ、周囲の環境がさまざまに変わっても変わらないものはあり続けます。例えば、研究所のミッションである障害のある子供一人一人の教育的ニーズに対応した教育の実現に貢献するということです。

わが国唯一の特別支援教育のナショナルセンターとして、研究所が研修所ではなく研究所である限り、障害のある子供がよりよい学びや生活を送れるようにするための研究、国の施策に即応した実際的な研究を進める必要があります。「総合」研究所として、障害全般にわたった研究を実施し、その成果は、学校現場の先生方を含め、広く国民に提供される必要があると思います。現在、リーフレット等での発信がなされていますが、何より研究者の立場で、論文として発表することも重要だと考えます。研究所の研究紀要を多くの人がインターネットで容易に検索できるように J-STAGE に掲載するなど、公表する場を拡大していただき、研究所の研究成果を広く知ってもらえるようにしていただけたらと思っています。

また、研究所の研究を進める際に協力いただいた学校等の具体的な実践を含んだ実践研究を掲載し、教育現場の先生方が目を通したくなるような論文を研究紀要に掲載することも検討していただけたらと思っています。

脈々と続いてきた研究紀要の発行、一年一年の積み重ねが将来に繋がります。紀要への投稿論文を増やし、研究所が特別支援教育研究を推進していく原動力となっていただけたらと願っています。

最後になりましたが、国立特別支援教育総合研究所の一層の発展と皆様のご活躍をお祈りいたします。